

Title	霊長類の歯の咬耗に関する研究(III 共同利用研究 2.研究成果)
Author(s)	石川, 雅章; 野間, 俊行
Citation	霊長類研究所年報 (1988), 18: 59-59
Issue Date	1988-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/163821
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

良い。歯髓細胞で見られたコラーゲン線維を入れた小体も観察される。10歳を過ぎると、辺縁性歯周炎の成立が認められる。その結果、コラーゲン線維は断裂・消失し、付着上皮の深部増殖が観察される。細胞も一部変性消失が見られる。なお、歯質-付着上皮間には歯小皮が存在するが、20歳例では肥厚・膨化し、顆粒状を呈している。

今後の課題としては、歯質の結晶レベルでの検討、歯髓や第二象牙質の基質成分の分析とその増齢的变化および歯小皮の本体解明における免疫組織化学的手法の導入であろう。

霊長類の歯の咬耗に関する研究

石川雅章・野間俊行（東京医歯大・歯）

研究目的：今回我々は、京都大学霊長類研究所所有のニホンザルの乾燥頭蓋の形態を、頭部X線規格写真を用いて計測し、それらの生前の成育した環境の違いがどのように顎態に反映されているかを見た。

資料及び方法：資料は、永久歯列弓が完成している adult のニホンザル計17個を用い、頭部X線規格写真での計測と実際の計測をすることにより、その形態の違いを明らかにしようとした。各々の計測値は、Sella Nasion の距離で等尺化処理したうえで、多変量解析しました。

結果：17個の顎態を多変量解析したが、環境による違いは明らかにされなかった。

各々のニホンザルは、食生活の違いは明らかにされず、また最も狭い環境で育った長瀬のニホンザルと、他の環境で育ったニホンザルとでは、統計的に有意な差の有る項目はなかった。

以上より、今回調べた限りにおいては、ニホンザルの形態に影響を及ぼす環境の因子は見つからなかった。

ニホンザルの歯の咬耗と機能・食性との関係について

小林 繁（九州歯大）

乳歯は永久歯に比べ摩滅が早く、咬耗の形成機

序、特に食性との関係を検討するには好都合だと思われる。そこで飼育された個体の咬耗および咬耗痕を調べる前に、野生のニホンザルの上顎第二乳歯において、wear facet や磨耗痕を調査した。資料は歯牙年齢の異なる子ザル4例8歯である。

〔方法〕 シリコーン印象材により歯牙の精密印象を採得し、エポキシ樹脂で模型を作成、イオン・スパッターにて金を蒸着し、走査電顕にて観察した。

〔結果〕 咬頭の摩滅は protocone, hypocone の順で始まり、postprotocrista, prehypocrista に拡大し、postprotocrista と prehypocrista が連絡する。次いで、preprotocrista と posthypocrista の摩滅は、隣接面方向に延長し、最終的にそれぞれ preparacrista および postmetacrista と連続する。

なお、咬耗面の形成は個体によって異っており、今後例数を増やしその法則性を検討する予定である。

課 題 12

Strongyloides fülleborni のニホンザルにおける感染実験

金子清俊・塩飽邦憲・千種雄一（愛知医大）

人獣共通感染症の原因となる *S. fülleborni*（以下 Sf と略す）について、その固有宿主であるニホンザルにおける詳細な感染経過に関する報告はみあたらない。そこで今回 Sf のニホンザルにおける感染実験を行い、その prepatent period、排出虫卵数（eggs per gram: EPG, eggs per day: EPD）、血液血清学的検査（赤血球数、白血球数、白血球分画、ヘマトクリット値、ヘモグロビン値、総蛋白量）、免疫学的検査（リンパ球幼若化反応、間接蛍光抗体法）および排出虫卵の自由生活世代の発育分化における感染経過に伴う変化について調べた。方法：実験に用いたニホンザルは5才の雄2頭（高浜659：A、若桜660：B）で約4,000匹の Sf フィラリア型幼虫を鼠径部皮下に接種し、25℃の恒温室で個別に飼育した。排